

# 川内市の成立に関する都市史的研究

小山田善次郎・松田 禎史

(受理 平成8年5月31日)

## A Study on the urban history of Sendai City

Zenjiro KOYAMADA and Tadashi MATSUDA

Sendai Town was established in 1929 and then was consisted of three combined Villages - Kumanojyou, Hirasa and Higashi Mizuhiki.

Mukouda-Cho which many merchants lived, was belonged to Kumanojyou-Go in 1659. It was formerly belonged to Hirasa-Go. There was the mayor-Ryoushu house and Samurai houses in Hirasa-Go, and the mayor-jyo house and Samurai house in Kumanojyou-Fumoto. They are called Kumanojyou-Fumoto and Hirasa-Fumoto. Kumanojyou-Fumoto and Hirasa-Fumoto accomplished the important part in order to plan Sendai City.

In particular, it is important that there was the economic development in Mukouda-Cho belonged to Kumanojyou-Go and in Shirawa-Cho belonged to Hirasa-Go.

### 1. はじめに

川内市は「川内八ヶ郷」(隈之城郷・平佐郷・水引郷・高江郷・百次郷・山田郷・中郷・高城郷)といわれるがごとく、8郷から成立している。しかし、その8郷が昭和15年の川内市誕生と共に合併したわけではなく、更に25年間の経過が必要であった(図1参照)。

したがって、「川内八ヶ郷」といわれるが、それは川内市が八ヶ郷から成立したというよりも川内川流域に存在した八ヶ郷という意味で用いられた言葉ではあろう。そうすると川内市の成立を考えるには川内川の存在が大切であったことが分かる。次に川内町が昭和4年に誕生する時の合併村は明治22年に生まれた隈之城村と平佐村、それに明治24年に水引村が東水引村と

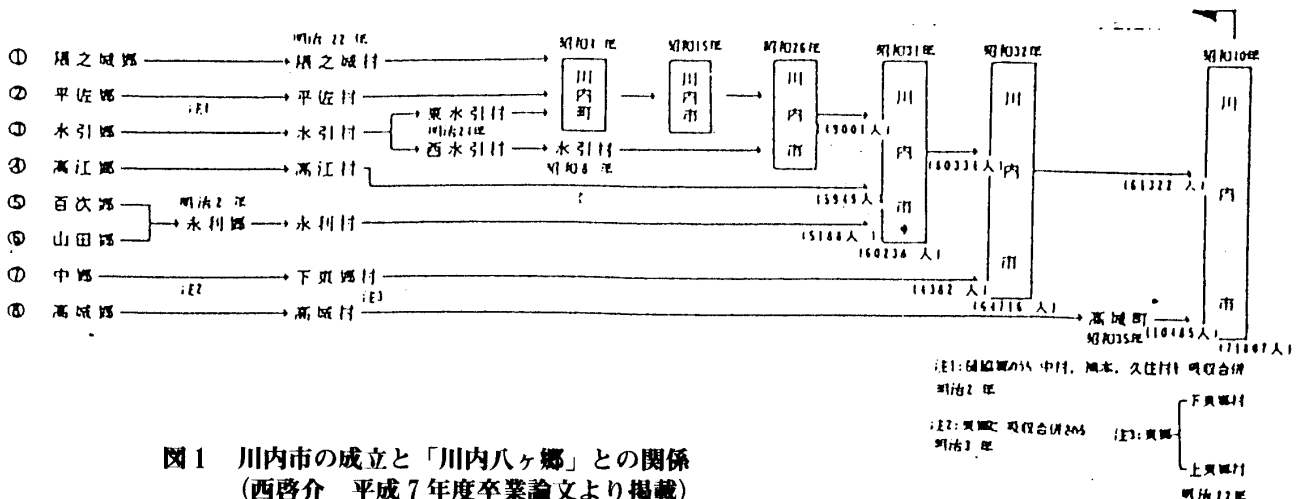


図1 川内市の成立と「川内八ヶ郷」との関係  
(西啓介 平成7年度卒業論文より掲載)

西水引村とに分かれたうちの東水引村であった。したがって、川内市の中核になった隈之城村・平佐村・東水引村を調べる事が重要になる。特に隈之城村は江戸時代、外城制の麓の一つ隈之城麓であり、平佐村は平佐麓であった。それらの麓がどのような要因で川内町になり川内市へ発展していったかが重要な課題となる。そこで川内市と隈之城麓・平佐麓に注目して論を展開することにした。

## 2. 交通の要衝としての隈之城麓と平佐麓

隈之城麓は島津家久が元亀元年(1570)に地頭となり、島津氏直轄地として支配されることになった。このときの居城は二福城で、近くを通る国道3号線や小学校敷地の埋立てで大分地形が変化した。この二福城跡には城の由来を記した「二福城跡」の標柱が立ち、子安観音の石像を祭っている。<sup>1)</sup>鎌倉初期以来の城であった中世山城の二福城は規模が200m角の複雑な形状で、丘陵地に立っていた。その形跡は消滅ではないにしても大分損なわれていると報告されている。<sup>2)</sup>現在二福城は失われつつあるが、二福城が安土桃山時代まで中世山城として存在したが故に、近世になって隈之城麓が成立し、地頭仮屋が建てられることになった。この二福城は東側に川内川支流の隈之城川が流れ、地頭仮屋がその二福城と隈之城川の間に築かれ、麓が成立するのは江戸初期に、恐らく一国一城令(1615)後間もない時期に建設されたであろう。

薩摩街道は隈之城川の上流の木場谷川に架かった旧水之手橋(現在の麓橋を渡って、隈之城麓の中心である地頭仮屋に近づき、東隅をかすめる程度に通って、隈之城川に架かった仏生橋を渡って北上する。更に街道は平佐川を渡って、平佐麓の地域に入り向田に向かい、川内川にでる。以上述べた通り隈之城麓は中世山城の二福城を背景に成立し、そこを重要な薩摩街道が通っていた。

平佐麓は川内川と平佐川に囲まれた地域に成立した。やはりここでも平佐麓の成立に中世山城の平佐城の存在があった。文禄四年(1595)島津義久は平佐・天辰以下7カ所(禄高11500石余)を北郷三久に与えて、私領としての平佐麓が成立した。この平佐麓の領主館のそばを薩摩街道は通っていなかった。しかし、平佐川を通して川内川へ出る浦町である向田を通っていた。この向田と白和は平佐麓の商業地として認められていた。その当初は川内川や河口で捕れた海産物の販

売程度で活発ではなく、街道の往来に比重がおかれていたであろう。ところがこの浦町の向田をめぐって利害関係がぶつかることになった。それは船の往来する川内川と薩摩街道との交点にあたることによる。藩主の参勤交代の折に向田町を通り、そこで船に乗り換えて対岸の水引郷に渡った。藩主にとって向田町は重要であり、その隣の白和町もまた必要であった。万治2万(1659年)に平佐郷に属していた向田町が隈之城郷に編入された。それは隈之城郷の草原と権現原との交換によるが、交通の要衝ということから、将来の交易の場、商業の場として発展することを見越して処置であっただろう。更に白和まで編入したかったが、白和町には北郷家に仕える多くの人々がおり、容易に事が進まなかった。そこで向田町だけが隈之城郷に編入された。これは向田町の発展に拍車をかける重要機会となったであろう。先に述べた二福城ふもとに造られた地頭仮屋が向田町に移され、御仮屋馬場には渡唐口(ととんぐち)があり、そこには藩主の宿泊所御仮屋、更に地頭仮屋、年貢米をいれる蔵などが並び、繁栄することになる。商業の発展があり、露店はこの向田町から白和町まで並んだという。白和町からは北郷氏の年貢米や諸物資が集められ積出された。川内川に面した直轄地隈之城郷の向田、私領平佐郷の白和は共に物資集参地として重要な役割を果たしていた。それは川内川を視点として見た場合のことで、更に薩摩街道を加えると向田町の重要さが増大する。つまり、川内川と薩摩街道の交点にあたる向田の重要さが指摘できる。

## 3. 平佐郷の特徴

豊臣秀吉は川内川対岸の泰平寺に陣をとり、天正15年(1587年)に平佐城を攻撃した。その時の地頭桂忠昉は反戦するが、藩主島津義久は秀吉のいる泰平寺までいき謝罪した。これで戦乱を終え、この地に文禄4年(1595年)に北郷三久が移住した。その時は平佐城を住居としたであろう。その後近世に入ると、平佐川との間に領主館や武士の集住地としての麓が成立した。この平佐麓が何時建設された明確な資料がないので分からないが、比較的早い時期つまり、江戸時代初期には成立したであろう。北郷家は13代270年間平佐麓にとどまり、その領主館は現在の平佐西小学校の位置にあった(図2参照)。この領主館は薩摩街道から東へ折れてJ Rのガード下をくぐればすぐに正面に出る。この正面前の街路を藤崎馬場と称して、馬場の両側に石垣がある(図3参照)。更に進むと大手口があり、

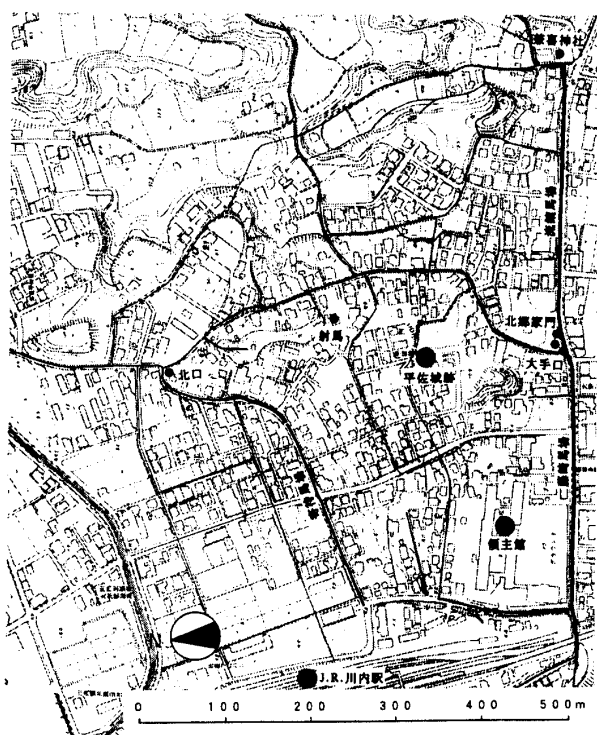


図2 平佐籠の構成

この大手口から兼喜神社までを流鏑馬場と称していた。大手口の東側に北郷家門（写真1）があり、この辺りに上級家臣が住んでいた。藤崎馬場や流鏑馬場の南側には平佐川が流れている。大手口は中世山城の平佐城への正面入口であり、ここから入った。その位置を近世になって籠に取り込んでいる。その大手口の背面口として北口があった。大手口と北口の間には射場があって、武術練習の場に使っていた。領主館の後方から北口までを寄待馬場と称していた。どこからどこまでが中世山城の遺構で、どこから近世籠による成立か分からないくらい入り組んでいる。それは文録4年（1595年）に平佐城に移った北郷氏が、そのまま近世籠を成立させたためであろう。したがって、街路を方眼紙のごとくに整備できなかったことを推察しうる。

兼喜神社は平佐北郷家初代三久が元和元年（1615年）に都城兼喜神社を勧請したことにはじまる。祭神は不運のもとに若くして死去した兄相久を祭る。本殿の細部意匠から棟札に見える13代代久徳の命による嘉永6年（1853年）建立の建物であると考えられる（写真2）。その後大正10年と昭和59年に改築されたことが棟札に記されている。都城兼喜神社は向拝柱に龍柱を立てて有名である。その影響を受けてであろうか、本殿扉の両脇に上り龍と下龍が彫られている。<sup>31</sup>この兼喜神社

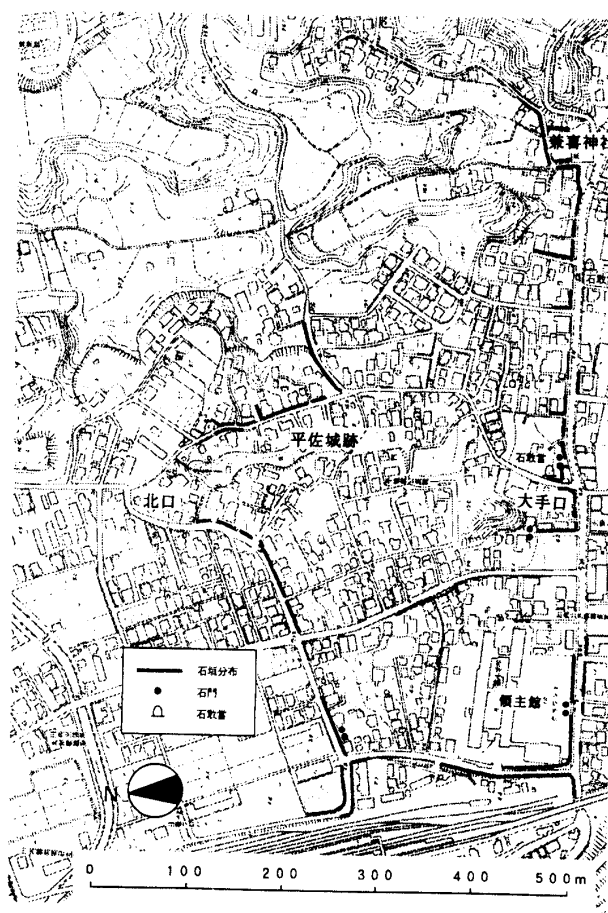


図3 平佐籠の石垣・石門・石取當の分布  
高藤誠 平成6年度卒業論文「薩摩藩における籠集落に関する研究—川内河河口における籠について—」



写真1 北郷家の門の写真

は北郷家代々の守護神とされ、安置された位置も大切であった。この位置は領主館の前面の街路を、つまり藤崎馬場を進み更に流鏑馬場を進んで、そのはずれにある。恐らくこの位置は平佐籠の東の端であろう。こ

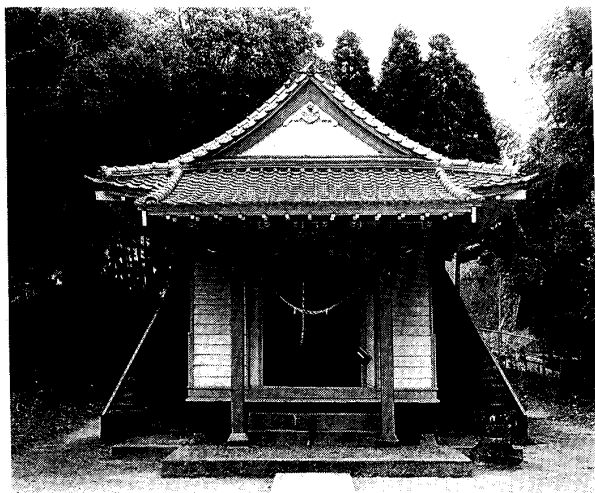


写真2 兼喜神社本殿

の位置は平佐麓を守護するにふさわしい位置にあるし、武士達がいざという時の集合地にもふさわしい。

実際に平佐麓の藤崎馬場と流鏑馬場を実測した結果によると藤崎馬場と流鏑馬場は共に150間に近い値を示した。その時の1間は6尺5寸で計算している。そこで馬場の長さを決めるに1間を6尺5寸として物差しを用いたと推定できる。<sup>4)</sup>その藤崎馬場と流鏑馬場の間に大手口があり、この位置が起点になっていると記している。その大手口がそのまま中世から近世への麓をつくる大切な役割を果たしたといえる。

平佐郷で重要な事として浦街としての白和を挙げておかなければならない。白和には北郷氏と共に都城から移住した武士が商人となって住んでいた。このために向田が隈之城郷に編入されても白和は平佐郷にとどまることができたという。平佐郷の中心をなす平佐麓を薩摩街道が通ってはいなかったが、川内川に面した白和の商業町としての活躍は平佐郷に大きな経済的支柱となったことであろう。これが川内町の成立に平佐町としての役割を担っていたといえる。

#### 4. 向田の成立と拡大

向田は当初平佐郷に属す浦町として白和と共に存在した。天保八年隈之城絵図をみると、白和につながる横町筋と薩摩街道に沿って町家が形成されている様子が伺える。この古絵図に描かれている横町筋と薩摩街道が交差する所の街家の間口の向きをみると、川内川寄りの街家は薩摩街道に、反対側は逆に横町筋に対して間口を向けている。このことは、当初町家の形成が薩摩街道上の渡唐口を中心に建てられたものと、

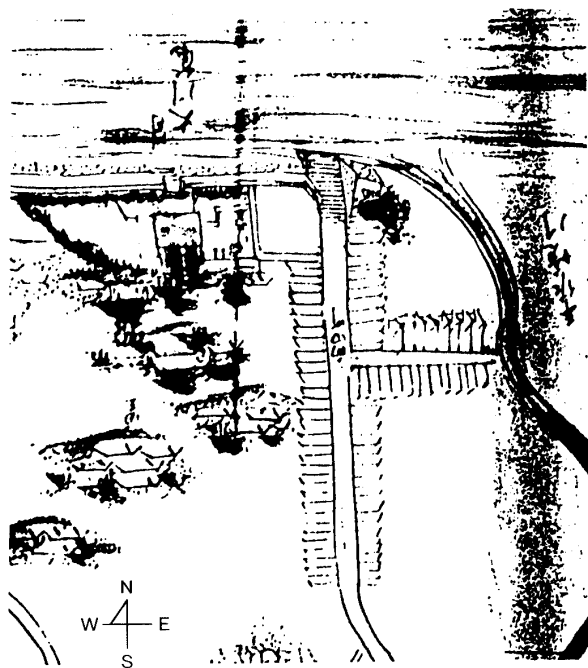


図4 天保八年隈之城絵図



図5 向田町割図

白和と接続する横町筋の春田川を中心として造られたものと二つの流れがあったということが出来る。また、この横町筋は薩摩街道と同じくらい重要であった。それは白和と接続し、白和まで露店が並び商業の発展がうかがえるからである。

次に字絵図と照らし合わせて見ると、天保八年隈之城絵図はちょうど、新町・横町・中町にあたる部分だけが存在しており、それ以外の上町・平池・石次郎は天保以降、向田の発展に連れ拡大していったものと考えられる。

次に町家の奥行きを調べると、薩摩街道の東側は、春田川による地理的要因で変化しているが、西側は川内川から離れるに連れ奥行きが狭くなっていくことがわかる。これは川内川河畔に藩主御飯屋や地頭御飯屋など重要な施設が設けられていたことから、その周辺に郷土が移り住み、商業的町家としてあったものが政治的意図によって、その後の向田の拡大をより一層うながすことになった。つまり、御飯屋を中心とした政治的要請により浦町が形成されて、発展したことが推察できる。

## 5. 川内市の中核を形成する向田

明治期に入ると、向田は隈之城村の行政を担う重要な場として引き続き発展して行った。また国道3号線の敷設や鹿児島―川内間の鉄道の開通で向田の都市的要素が一層強まっていく。元来平佐郷に属していた向田もこの鉄道の敷設と駅の設置により裏と表に分断され、都市の中の明暗を余儀なくされた。一方向田は、昭和4年に隈之城村と平佐村と東水引村の合併により

川内町が発足し、この三村の中心として町役場が置かれ、都市としての求心力をもった。その後徐々に求心力を強め、広域にわたる川内市の中核として現在に至る。

このように、商業を中心とする経済と地頭御飯屋の持つ政治性が結びつくことで、現代都市としての条件を早くから持ち得た。このことが向田を川内市という現代都市の中核としてならしめた要因であろう。

## 6. おわりに

これからの住民のしあわせを目的とする都市計画のために、自然と人間が調和した美しい景観要素の分布とその組合せルートの設定が重要である。そのために、川内地方の都市計画の課題として、川内川の豊かな流れと、橋、それに伝統的な町がある。

## 注

- 1) 歴史の道調査報告書 第1集 出水筋 鹿児島県教育委員会 1993年3月 p.206
- 2) 鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(43) 鹿児島県の中世城館跡―中世城館跡調査報告書― 鹿児島県教育委員会 1987年3月
- 3) 鹿児島県の近世社寺建築 鹿児島県近世社寺建築緊急調査報告書 鹿児島県教育委員会 昭和63年3月
- 4) 高藤誠 平成6年度卒業論文「薩摩藩における麓集落に関する研究―川内川河口における麓について―」